

ダンジョンに
会えるのは
出会いを
求めるの
間違える
2

大森 藤ノ
OMORI FUJINO
イラスト ヤスダスヒト
YASUDA SUZUHITO



試し読み版



プロローグ 弱者の嘲笑

イラスト・デザイン
ヤスダスズヒト

サポーター。ダンジョンの探索時における非戦闘員。

主に魔石やドロップアイテムといった戦利品を回収し、地上に無事運び届けることが役目。前線でモンスターと戦うパーティに負担をかけぬよう、バックアップの全般を担う裏方役。詰まるところ、サポーターとは、荷物持ちだ。

「おい、何してやがる！ とつととしろ！」

今日もまた罵声が飛ぶ。

彫れに彫れた大荷物を背負い、僅かに遅れた足取りを、冒険者である男は唾棄するように責めた。

燐光を灯し光源だけは困らない迷宮の中。

蔑みを隠さないその声が、酷く反響していく。

「荷物を運ぶくらいでちんたらしやがって、能無しが！」

ただの荷物持ちと非難する、これまで耳にたがができるほど聞いてきた、代わり映えしないその文句。

傲慢な言葉は時に横暴な暴力にも変わる。常に上の立場にいる彼等は下敷きにされる者に痛痒など覚えない。

冒険者はサポーターを顧みない。

ましてや、専門職のサポーターなど嘲弄の対象でしかありえない。

彼等は弱者にとこまでも残酷になれる。

金も、尊厳も、希望も、全てを奪っていきけるのだ。

次のような言葉をどこかで聞いたことがある。

曰く、良きサポーターに恵まれなければ冒険者は真価を発揮できない。

曰く、サポーターの働きがあつてこそ冒険者はダンジョンにもぐれる。

曰く、彼等は縁の下の力持ちである。

随分と取り繕った綺麗な言葉だが、なるほどとも頷ける。確かに道理だろう。一理ある。

サポーターの存在が冒険者の負担を軽くする一役を買っている。これは否定できない。

「役に仕事もこなせねえ足手纏いに、くれてやる報酬なんざねえぞ！」

だが、そのことを一抹でも理解してくれる冒険者が、どれほどいるのだろうか。

サポーターのありがたみを認識してくれるような殊勝な冒険者が、一体どこにいるのだろうか。

専門職であるサポーターに、目の前のような侮蔑を向けない、そんな奇特な者が、果たして存在するのだろうか。

「いいか、モンスターに囲まれた時くらいはしっかり仕事をしろよ——役立たず？」

いざとなればモンスターの囷にちよいどいい。

堂々とそんなことを口にする冒険者様を見て、笑いが漏れてしまった。

なるほど、なるほど。
本当に、みかき見限るのに困らない奴等だ。
かたがた冒険者というものは。

1章

デート
の
サポーター



じり、じり、と土を囓む音が鳴る。

天井から燐光の光が落ちてきて、四方八方を薄緑色の壁に囲まれた辺り一帯を照らし出す。
『ルーム』と呼ばれている、ダンジョン内で正方形に開けた空間だ。

僕はその中で逆手に持った《神様のナイフ》をソイツに向けていた。

四本の足に二本の細い腕、大きな双眼。赤一色に染まっているその姿は蟻を連想させる。

普通の蟻と異なるのは、体が僕と同じくらい巨大なことで、そのくびれた腰を起点にして上半身がもたげるように起き上がっているということ。

『キラアアント』。

7階層になって初めて姿を現すモンスター。冒険者の間では6階層の『ウォーシャドウ』と並んで『新米殺し』と呼ばれているらしい。

その名前の謂れは身に纏った頑丈な硬殻と、ゴブリンのような低級モンスターとは比べ物にならない攻撃力。体の表面を覆っている外皮はまるで鎧のように硬い。半端な攻撃は弾かれてしまい、そうでなくともあの殻の上から肉体に直接ダメージを与えるのは大変手こずる。

腕先には発達した四本の鉤爪。湾曲した歪な突起は不気味な光沢を今もちらつかせている。防御を攻め崩せない間に鋭い爪で致命傷をもらう。これがキラアアントにやられるパターン。

これまでとは明らかに勝手が異なるモンスター故に、5階層までの敵に慣れ切った冒険者達はことごとく奴等の餌食になるのだ。

『ギギッ』

キチキチキチッ、とキラアアントが口をもごもごと動かし歯を鳴らしている。

実はこのモンスター、仲間を呼んだりする。叫び出したりはしないけれど、どうやら僕達にはわからないフェロモンみたいなものをピンチに陥ると発散するらしいのだ。

本当に硬殻との相性がいい。僕達冒険者からすれば最悪なだけだ。

とにかく、倒すなら速攻。最良なのは一撃で完全に息の根を止めることだ。

数歩の間合いを置いて、僕とキラアアントは睨み合う。

「——ふっ！」

動いたのは僕。反撃とか後攻とか、そういうのは性に合わない。

こちらから仕掛け、肉薄、吠声とともに右腕を振りかぶってくるキラアアントへ突っ込む。

宙に白い弧を描いた敵の四本の鉤爪が、視界の左側から迫り——切断。

僕の方が一瞬速い。キラアアントを上回る攻撃速度で、その鉤爪を前腕から斬り裂いた。

『ギッ?！』

右腕——武器の無くなったキラアアントの右側面へ回り込み、その痛みの呻き声を耳にしなから、僕は《神様のナイフ》を次の瞬間のために溜める。

キラアアントを上手く倒すには、硬殻の隙間を狙い、奥の柔らかい肉を攻撃するのが常套手段。狭い殻の間を突くのは駆け出しの冒険者には難しいけど、少なくともそれがセオリー。

だけど、僕はあえてそれを無視した。

腕がなくなつて無防備な半身を晒すキラアントの首めがけ、漆黒の刃を真一文字に薙いだ。

「」

首を守る硬殻ごと刃が沈み込んでいく感覚。

感触は最初だけ。後は大した抵抗もなく刃は滑り込み、僕はいつもそうするように自然体で腕を振り切った。

サンツ、と小気味いい音とともにナイフが流れ出て、そしてキラアントの首は宙を飛ぶ。

首の断面から滴る紫色の体液。上空を錐探みするモンスターの頭部は、何が起ったのかわからない、そんな眼を浮かべながらやがて地面に墜落する。

間を置かず、首を失った体が思い出したように脱力し、地面に崩れ落ちた。

「……うん、いい!」

刀身を振るって付着した体液を飛ばしながら、僕は《神様のナイフ》を見た。

手の平に吸い付く感覚。まるでずっと一緒に居たかのように、僕の手に馴染んでいる。

威力も申し分無し。あのキラアントの硬殻をバターののように切り裂いてしまった。

すごい、これがヘファイストスの武器!!

神様が、僕のために贈ってくれたもの!

「♪」

新しい玩具をもらった子供のように浮かれながら、葬ったモンスターの魔石回収作業を行う。

実際、今の僕は子供と大して変わらないだろう。年一回の誕生日に祖父から英雄達の絵本をもらった、あの時の気持ちと似ている。当時はずっと大切に読もうというも思っていて、最初の内は触れて汚れるのが怖かったくらい。

流石に今は使うのがもったいないなんて言わないけど、心が浮かれ立つのは止められない。

(ありがとう、神様……)

最近何だかとても忙しそうにしている神様の顔を思い浮かべながら、僕は感謝の思いを笑みと一緒に滲ませた。

絶対強くなる。この武器の相応の持ち主になるように、神様の思いを蔑ろにしないために。腰に差した鞘にナイフをしまい、僕は7階層の探索を続けた。



「ななかああいそお?」

「は、はひっ!」

ベルは悲鳴を上げた。胡散臭げな声とは裏腹に、目の前で眉根を寄り合せるエイナから怒気の気配をぶんぶんと感じ取ったからだ。

本日7階層の探索を終えたベルは、ヘステシアから贈られたナイフの存在もあって先程上機嫌にギルド本部へ凱旋した。戦利品を換金し終えた後、己のアドバイザーであるエイナのもとへ顔を出すが、近況報告をと意気揚々に足を運んだのだが——到達階層を7階層まで増やしたと彼女に話した瞬間、ベルの絶頂期は終わりを迎えたのだった。

「キイミはっ！ 私の言ったこと全っ然っわかってないじゃない!! 5階層を越えた上にあまつさえ7階層!? 迂闊にもほどがあるよ!」

「うううううめんなさいっ!」

ダンッ! とエイナは机に両手を叩きつける。彼女の斜に構えられた緑玉色の瞳に射竦められ、ベルは蛇に睨まれた蛙状態だった。

エイナが怒っているのは言葉の通り、ベルが身の程もわきまえず到達階層をホイホイと増やしたことにある。彼女の持論でいうのなら、『冒険』を冒したこと、それを責めているのだ。

「一週間とちよっと前、ミノタウロスに殺されかけたのは一体誰だったかな!」

「ほ、僕ですっ!」

「じゃあ何でキミは下層に降りる真似してるの! 痛い目に遭ってもわからないのかな、ベル君は!」

「す、すいません……!」とベルは涙目になるが、エイナにしてみれば本当に思いやつての叱りつけだ。ベルに死んでもらいたくない一心で身も心も鬼のようにして吠えている。

冒険者になって半月程度の未熟な新米が、5階層以降に進出するのは自殺行為に等しい。

5階層からはダンジョンの傾向が様変わりしてぐっと難易度が増す。ベルが足を踏み入れた7階層で例えるなら、クリアアントが仲間を呼んだ瞬間そこで終わり。コボルトの群れとはわけが違う、一人ならあつという間にあの蟻のモンスター達に食い散らされてしまうだろう。

「キミは危機感が足りない! 絶対に足りない! 今日はその心構えの矯正に加えて、徹底的にダンジョンの恐ろしさを叩き込んであげる!!」

ひいつ、とベルは情けない声を出した。

エイナの指導のスパルタぶりはこの半月の間で体の奥にまで植え付けられているからだ。

彼女の教えは間違いない彼にとって実利として現れているが、しかしその特訓まがいの教授を、ハイ任セテクタサイと快諾できるかはまた別問題。ベルは慌てながら弁明に走る。

「ま、待ってくださいっ! そのつ、僕っ、あれから結構成長したんですよエイナさん!」

「アビリティ評価Hがやつとのくせに、成長だなんて言うのはどこの口かな……!」

「ほ、本当です! 僕の『ステイタス』、アビリティがいくつかEまで上がったんです!」

「……E?」

ぴたり、とエイナは動きを止めた。きょんと目を丸くさせる。

ベルの咄嗟の発言が何を言っているのかわからず、理解したところで、すぐに信用していない表情を浮かべる。

「そ、そんな出まかせ言ったって、騙だまされるわけ……」
 「本当です本当なんです！　なんかこのごろ伸び盛りっていうか、とにかく熟練度の上がり方がすごいんです！」

「……本当に？」

ぶんぶんぶんつ、と勢いよく頷くベルの姿に、エイナは戸惑とまどった顔をした。

ベルの担当アドバイザーになってまだ日は浅いが、目の前の少年が嘘をつく時とそうでない時はなんとなしにはわかるからだ。

エイナの洞察とうさつによれば、今ベルは嘘を言っていない。

「……本当に、E？」

「は、はいっ」

ちょっと待って、とエイナはベルに手の平を向ける。

残っている手でS、A、B、C、D、E……と指を六回分折ったところで、「むむむっ」と声をこぼす。もう一度S、A、B、C、D、E……六回。結果は変わらない。

エイナも混乱していた。ベルは嘘を言っていない、言っていないが、基本アビリティがEまで上り詰めたという法螺話ほろばなしなどとても信じられないのだ。

エイナが口にしたアビリティ評価Hという予測は、何も当てずっぽうに言ったものではない。半月という時間幅スパンで冒険者が達することのできる妥当だとうな能力ラインが、得意不得意な分野関係

なしにHなのだ。それともかなり腕の良い者に限った話。

Gだったらもうでき過ぎで、そしてF以上というのは……いくらなんでも早過ぎる。

これが冒険者になる前から戦いの心得を持つ者だったら多少の説得力があったのだが、生憎あいにく目の前の少年は元農民だ。しかし、ベルは嘘をついていないとくる。

「むむむむっ」と難しい顔を継続するエイナは人差し指をその細い顎あごに当て考え込む。

一人沈黙に取り残されるベルは、若干居心地が悪そうに身じろぎをした。

「……ねえ、ベル君」

「は、はい？」

「キミの背中に刻きまれてる【ステイタス】、私にも見せてくれないかな？」

「……えっ!？」

至って真面目な顔をしてそんなことを言ってくるエイナに、ベルは声を高くはね上げた。

「あつ、キミの言っていることを信じていないわけじゃないんだよ？　ただ……」

エイナは慌てながらばたばたと両手を振って誤解を解く。

そつ、ただ……ベルの主神であるヘステイアが、彼に間違った情報を与えているのも無きにしも非あずではないか……と彼女は考えていた。

もしくは、情報伝達の間で何らかの齟齬そごがあったのではないのか、と。

そんな風に疑ってしまうだけ、Eという記号はエイナにとって非常識な代物しやうものだったのだ。

それこそ動かぬ証拠を提示してもらわなければ、ベルの言葉を用いることはできない。

「で、でも、冒険者の『ステイタス』って、一番バラしちやいけないことですよね……」

都市の冒険者を管轄下に置くギルドの中でも個人情報漏洩は「法度だ」。Lv.などは各個人のランク付けや各派閥の強さの指標として報告の義務があるが、後はその限りではない。

中には稀少な「スキル」や特殊な「魔法」を持っている者もいる。【ファミリア】という組織の特性からして容易く今日の友が明日の敵になる現今、弱点等を晒さないために情報の黙秘は行われて然るべきだ。

「今から見るものを私は誰にも話さない約束する。もしベル君の『ステイタス』が明るみになることがあれば、私は相応の責任を負うから。キミに絶対服従を誓うよ」

「ふ、服従って……。そ、そもそも、エイナさん【神聖文字】読めるんですか？」

「うん、ちよっとただけけど。【ステイタス】のアビリティくらいは読み取れると思う」
これでもエイナは学区に通い、総合神学を専攻していた秀才だ。

簡単な【神聖文字】なら読み書きできる。

「この目で確認させてもらえなかったら、私、いつまで経ってもベル君に5階層より先に行っちゃダメー、って言うよ？」

「そ、それは確かに、勘弁してほしいです……」

「魔法やスキルのスロットの方は見えないから、ね？　お願いっ！」

「別に僕はスキルも魔法も発現してないですから、それはいいですけど……わかりました」
両手をぱんつと鳴らして頭を下げるエイナにベルは折れた。

今まで散々世話になってきたことに加え、彼女にはヘステイアと同じように絶対の信頼を寄せている。ベルはエイナの言葉を疑う気にすらならなかった。

「えっと、じゃあ……脱ぎますよ？」

「顔を赤くするくらいなら一々確認しないっ！　私の方も恥ずかしくなっちゃうよ！」

お互い頬を染めながら席を立ち、空間のゆとりがある部屋の間に向かう。ベルは気恥ずかしさを呑み込んでさっさと上半身裸になった。

背中を埋めつくす黒刻の【ステイタス】より先に、意外に鍛えられている上半身に少しの間見とれてしまったエイナだったが、すぐにはっとして顔を左右に振る。

ほっそりと尖った耳を赤くしながら、じっと【神聖文字】の解説に入った。

ベル・クラネル

Lv.1

力…E 403 耐久…H 199 器用…E 412 敏捷…D 521 魔力…I 0

(うそ……)

半ばその可能性は受け入れていたものの、いざこうして突き付けられると呆然としてしまふ。

『魔力』は除いたとしても7階層クラスのモンスターなら単独でも十分遅れを取らない能力内容、防御を重視するエイナからすると『耐久』の低さには小言を挟みたくなるが、それでもベルの戦闘方法はアビリティ傾向から見ても撓乱回避を主眼に置いて一撃離脱、許容範囲内だろう。

また、『敏捷』がDへ突入しているのを見て、噴き出しそうになってしまった。

(信じられない……)

エイナは静かに喉を鳴らした。自分の常識があつさり壊れていく音が耳の奥で響き、ややもすると薄寒い冷気が背筋を撫でていく。職業柄、ダンジョンにもぐる冒険者の様々な情報に精通するエイナだからこそ、目の前の光景がどれだけ逸脱しているかよくわかる。

ベルの『成長』は、あまりにも度を越えていた。

——スキル？

一瞬脳裏を過つたのが、その可能性。

能力の開花がこの型破りな成長力として発現したのでは、とエイナは懊悩に近い思考をしばらく働かせていたが……そこでふと、一つの魔が差してしまう。

(……ちよっとだけなら)

背中の中頃辺りへと続いている『神聖文字』に目が奪われる。

その先にあるのは、『魔法』と『スキル』のスロットだ。

ここまで来てしまうと、この抗いがたい衝動に逆らうのは不可能に近かった。蓋が開けっ放しの宝箱の中身をついつい覗こうしてしまうのは、もはや亜人の性なのか。

好奇心が疼き、エイナはちらりと魔法とスキルのスロットを確認してしまう。

(……あ、駄目だ)

読めない。

高度な『神聖文字』の羅列によって、エイナでは魔法とスキルの欄が解説できなかつた。

——実は、親馬鹿であるヘステシアが万が一に備えて、ベルの能力に影響を与えない範囲で『神聖文字』に細工をし、『ステイタス』にプロテクトをかけていたのだ。『神聖文字』の体系と真髓を把握し切っていないエイナには、その嫌に複雑で奇怪な刻印の構成がヘステシア独自の書跡、つまりは彼女の書き方の癖だという風に映ってしまい、勘違いしてしまふ。

ベルの実態をめぐる駆け引きは、今回はヘステシアに軍配が上がった。

「あのー、エイナさん……まだですか？」

「あ……も、もういいよ！」

ベルの恥ずかしそうな声に、エイナは耳をピクツと揺らして今の状況に気付いた。照れて笑いながら『ステイタス』から目を背け、いそいそと着がえ出すベルに内心で「ごめんねと呟く。

しかし本当だったのか、とエイナは唸る。

この能力値ならば、ベルの7階層進出を許可しないわけにもいかない。絶対とはいかなくても、

間違いを起こさなければ優にソロでも通用するレベルだ。

——だがそうになると、次に巻き起こるのはまた別の懸念^{けんねん}だった。

「……」

「な、なんですかっ？」

着替えを終えたベルのつま先から頭^{あたま}の天辺まで、エイナはくまなく視線をそくく。無遠慮にじろじろと見てくるそんなエイナの瞳に、ベルは声を上擦^{うわす}らせた。

別段エイナは、ベルの全身を舐めるように見ているわけではなかった。

彼女が見ていたのはベルの体ではなく、その身に付けている装備品……貧相^{ひんそう}な、防具だ。

「ベル君」

「は、はい？」

「明日、予定空いてるかな？」

「……へっ？」



あれから一日たった。

僕はオラリオの北部で、大通りと面するように設けられた半円形の広場に一人立っている。

エイナさんと待ち合わせをしているためだ。

そう、待ち合わせ……。

（こ、これって……デート？）

そんなことあるわけないのに、つい思ってしまう。

昨日エイナさんが持ちかけたのは、僕の防具を一緒に買いに行かないかというお誘いだった。

僕のダンジョン攻略状況と現在の装備を照らし合わせて、今の防具では頼りないと判断をしたらしい。面倒見のいいあの人が、僕のためにわざわざ世話^{せわ}を焼^やいてくれたのだ。

そう、だから、他意^{たいつ}なんてない。親切^{せんせつ}なあの人の、親切なお紹介^{せいかい}……。

（……なんだけど、傍^{はた}から見たら、もう……）

形式的には、成り立つちゃう。

朝十時に広場の銅像前集合とか！ 二人きりとか！

うわー！ うわーっ!?

「おーい、ベールくーん！」

「！」

そして、とうとうその時^{とき}がきた。

あの耳をくすぐる可憐^{かれん}な声の持ち主が、視界の中、小走りをして徐々に大きくなってくる。

「おはよう、来るの早いね。なあに、そんなに新しい防具を買うのが楽しかったの？」

「あつ、いや、僕は……！」

——エイナさんと二人きりになることを、変に意識していました。なんて、はっきりと伝えられない僕は意気地無しなんだろうか。

僕は落ち着かない表情で視線を左右に揺らした。

「まあ、実は私も楽しみにしてたんだよね。ベル君の買物なだけだし、ちよつとわくわくしちゃってっ」

エイナさんの服装はいつもと装いが異なっていた。普段はギルドの制服でぴしつと決めているけど、今日はレースをあしらった可愛らしい白のブラウスに、丈の短いスカート。ちよつとお洒落で軽い感じ。よくかけているところを目にする眼鏡は、今日は外している。

ギルドの制服姿を見慣れちゃっているせいかな、大人びた雰囲気さがらつと変わったエイナさんは、なんていうんだろ……凄く眩しい。

そう、可愛いんだ。

エイナさんお得意の懸隔の術中に、僕は見事にはまってしまっていた。

「装備品なんて物騒なものを買いにくのにわくわくするなんて、私おかしいかな？」

「そ、そんなことないですっ！」

僕が慌てて否定すると、エイナさんはくすくすと笑い出した。うわあ、うわあ……。ギルドの職員の中でも冒険者達の人気が一、二を争うのも領けてしまっ

ハーフエルフって、どの人もエイナさんみたいなのかな……。

「コホン。それで、ベル君？」

「な、なんですか？」

「私の私服姿を見て、何か言うことはないのかな？」

悪戯好きな子供みたいな瞳で、上目遣い。

うわあ、ウワァー……。

「……そ、その、すっごく……いつもより、若々しく見えます」

「こら！ 私はまだ十九だぞおー！」

「あいたたたたたたたたたたっ！」

エイナさんの細くて白い腕が、僕の首の付け根あたりに巻き付く。

そのまま脇に抱えられて締めつけられて……ぐいぐいつて、僕の頬がエイナさんの胸に……。

「はら、謝れー！」

「や、やめっ、許してくださいあああああああああああああああいつっ！」

エイナさんのおかしそうな声音が耳をくすぐる中、僕は思いつ切り叫んだ。

試し読み版

ダンジョンに出会いを求めるのは 間違っているだろうか 2

発行 2013年2月28日 初版第一刷発行
著者 大森藤ノ
発行人 新田光敏

発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒106-0032
東京都港区六本木2-4-5
電話 03-5549-1201
03-5549-1167 (編集)

装丁 ヤスダスズヒト
株式会社ケイズ (大橋勉/彦坂暢章)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを
することは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。
©Fujino Omori

Printed in Japan

GA 文庫



試し読み版はここまで！
続きは2月15日頃発売の本編にてお楽しみ下さい